20250205　チョコレートに危機が！

いよいよ来週末にバレンタインデーがやってきます。

今更確認するまでもないと思いますが、この「バレンタイン」というのは、キリスト教における聖人（右絵）の一人です。古代ローマ帝国で、戦争に行く若者に禁じられていた結婚を密かに取り持ってあげていた司祭です。この司祭は、皇帝の命に背いたということで処刑されてしまうのですが、14世紀頃から、恋人同士を結び合わせたというエピソードから、この聖人を祭る日に恋人同士がプレゼントを贈り合う習わしとなっていきました。しかし、その贈り物の主役は決してチョコレートではありません。チョコレートを贈るのは日本独自の風習です。

さらに、バレンタインデーに女性からのみ贈り物をするのは日本だけのようです。そのお返しとして、ホワイトデーを設定したのも日本だけです。1978年のことでした。仕掛け人もはっきりしていて、全国飴菓子工業組合です。

ところで、チョコレートは世界的に巨大なビジネスで、世界市場は年間10兆円規模で、今年は15兆円になるとも予測されています。日本人の消費量も増え続けていて、一人当たりの消費量が2009年に1.74 kgだったものが、10年後には2.19 kgとなっています。その年間消費量の約2割が、バレンタインデー数日のために消費されるといいます。

ところで、「チョコレート」という話題から、五小の先生方なら、そろそろ「児童労働」や「スマイルカカオ運動」の話になるのだろうなと、ピンとくると思います。

もちろん、実にカカオ栽培を支える労働力として児童が搾取にあっている実態は決して改善されているわけではないのが現実です。その問題を無視するわけではないですが、今、チョコレート産業を支えるカカオ栽培自体が危機に瀕しているということについて考えていきたいと思います。

皆さんご存じのように、チョコレートの原料はカカオ豆です、主な原産地は、西アフリカのコートジボワールやガーナ（右地図）です。ここは、熱帯です。特にこの両国の南部は豊かな熱帯雨林です（でした）。当然病害虫との戦いは避けられませんから、農薬の使用は必須です。熱帯雨林を切り開いて作ったカカオ園は、単一栽培の宿命として病気との戦いもあります。カカオの木を早く成長させ、豊かな実りを確実にするために肥料も欠かせません。

しかし、日本が最も多くカカオ取引をしているガーナは、経済危機のために、ここ数年、農薬と肥料の農家への提供をストップしてしましました。カカオの木が病気（カカオ膨梢ウイルス）にかかったら、その木はすぐ伐採しないと農園まるごと危機になります。しかし、農家は切りたがらないのです。気持ちは分かります。そうして、ウイルスは蔓延していきます。

そして、今、ガーナに訪れているブームがあります。「金」です。実は、アフリカ最大の産金国がガーナなのです。経済危機のガーナにあって、金採掘(右画像)は重要な地位を占めています。違法採掘もさかんに行われ、ガーナの金の４割は違法採掘ともいわれています。この違法採掘のために、カカオ農園が次々と重機で掘り返されているといいます。しかもそこには、金目当ての海外資本の影も見え隠れします。

そして更に気候変動が追い打ちをかけます。年々雨季はより激しく、乾季はより苛烈になってきている状況で、このままではカカオ栽培そのものが危機を迎えるでしょう。

ガーナは、カカオ農園拡大によって、アフリカのアマゾンとも形容された貴重な熱帯雨林をほぼ伐り尽くしました。それは、ヨーロッパをはじめとする先進国の人々に美味しいチョコレートを提供するためでした。悲しいことに、現地の農園で働いている人たちは、カカオがその後、何になるか知らないといいます。チョコレートを知らないで、ただカカオを生産しているのが現実なのだそうです。

そして、そのカカオ農園を今度は「金」採掘業者が破壊しています。

西アフリカで危機に瀕したカカオ生産の次の受け皿と見られているのが、中南米です。ここにはまだ未開発（？）のアマゾンがあります。この地球最後の熱帯雨林にカカオ園拡大のメスが入っていくのも時間の問題かもしれません。

目の前の利益、限られた人だけの豊かさを追求した先にこうした現実があります。欲望の連鎖が危機をつくり、助長し、結果的に地球そのものをじりじりと追い詰めていきます。

カカオの問題は、一番身近で分かりやすい形で、私たちにもその影響が現れようとしています。すでに昨年から先物価格は上昇し続けています。日本でも、今月から値上げが示されました。チョコレートが、突然あれよあれよという間に高騰し、庶民の味ではなくなる日が来る・・・そんなシナリオがすぐそこに迫っているかもしれません。